

## 家政学における典型研究法の意義(2)

親となることによる発達-障害をもつ子の親の場合を典型として

○ 岸端康代\* 森圭代\* 金田利子\* (\* 静岡大)

【目的】親となることは、親のどのような側面における発達を促すのかを明らかにすることを目的とするが、特に本研究においては、無作為抽出法では、その本質が明らかにされ得ないであろう「障害をもつ子の親」となることによる発達に焦点を当てていく。生まれたわが子が障害をもっていたという、親として最も受け入れ難い矛盾を克服しつつ、内的質的に変化し続けているであろう障害をもつ子の親の発達の内実に、親としての発達の典型が見られるのではないかと考えたからである。

【方法】①障害をもつ子の親及び健全な子をもつ親を対象に「親となって変化したと思うこと」「親となって学んだこと」を問う自由記述方式による質問紙調査を行い、得られた項目を、関連文献等を参考に作成した9つのカテゴリーに分類、整理することによって、障害をもつ子の親の発達の特性を明らかにする。そのうえで、②障害をもつ子の親12名を対象とした面接調査を行い、子育て過程と親の発達を促すと思われる親の支えとなったものについて探っていく。

【結果と考察】障害をもつ子の親は、9つのカテゴリーのうち『人間観・社会観の高まり』『自己主張の強さ』の2つの側面において、健全な子をもつ親に比して、変化を強く意識している傾向があるという結果が得られた。そしてさらに詳細に記述内容を分析した結果、障害をもつ子の親は、親となることによって「人権」に対する意識を高め、同時に子ども「代弁者」としての役割を果たすことによって、それらを具現化する力を発達させているのではないかということが導き出された。これらの結果から、親となることによる発達の本質が示唆されたのではないかとと思われる。